

# 受験期に落ち込む 生徒への声かけは？



学年末も近づき、特に高校3年生は進路決定の大詰め。  
早々に進路が決定して浮かれる生徒がいる一方で、  
努力の成果をなかなか出せない生徒が気になりになる時期です。  
そんな受験期の生徒への声かけを、今回は考えてみたいと思います。

取材・文／清水由佳 イラスト／おおさわゆう



【解説&アドバイス】

会津大学 文化研究センター  
教授  
荻間澤勇人先生

かりまざわ・はやと●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県の公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

## 今回のケース

### 受験直前に停滞している生徒との面談

<ケースの背景・状況>

センター試験で思ったほどに点数がとれず、落ち込んでいる3年生。  
焦るばかりで最後の追い込みにも熱が入らず、負のスパイラルに陥っているようなので、声をかけた。

ありがちなやりとり

①

やりすぎて  
生徒を振り回す

先生：最近受けている大学の手応えはどうだ？  
生徒：・・・あんまり。  
先生：それは困ったな。今、どんなふう勉強しているんだ？  
生徒：なんか、家で机に向かってはいるんだけど、  
いろいろ気になってなかなか頭に入ってこなくて・・・  
先生：この時期は、確かに一人であれこれ不安になるよな。  
じゃあ、学校で集中的に勉強したらいい。先生も付き合うから。  
明日から毎朝30分早く学校に来られるかな。  
昼休みも先生の部屋で勉強すればいいし。  
放課後は、苦手だと言っていた英語の先生にも協力してもらおう。  
とりあえず、明日は今使っている参考書や問題集を  
みんな持ってきてなさい。そこで、傾向と対策を(と細かく指導を行う)。

(解説&アドバイス) **親切が過ぎておせっかいに注意。あくまでも生徒が主体で。**

共感性が高く、熱心な先生にありがちなパターンです。生徒の悩みや不安をしっかり受け止められるのはいいのですが、先生まで一緒になってどっぷりはまってしまい、余計なおせっかいまで焼いてしまっています。

進路決定は、あくまでも「生徒が主体」です。先生が主導するのではなく、質問によって生徒が自分で気づき、行動につながれるように後押しすることが大事です。その点、世話焼きタイプ

の先生は、生徒が考えるのを待ち切れずに、あれこれ先回りして答えを出してしまいがちです。このケースでも、生徒は完全に受け身になっています。納得しない対処方法では、効果が出ない可能性もあります。

また、このタイプの先生は、表情や態度からも、生徒によっては「うざい」と言われる可能性があります。押し付けにならない適度な距離感も大切です。

ありがちなやりとり

②

## ひたすら激励& お説教モード

先生：最近受けている大学の手応えはどうだ？  
生徒：・・・あんまり。  
先生：なんだ、そんな元気がないようじゃ、ダメだぞ。  
生徒：でも、なんか、受かる気が全然しない・・・。  
センター試験の結果、散々だったし。  
先生：そんな弱気でどうする。今、毎日どのくらい勉強しているんだ？  
生徒：う～ん、とりあえず机には5時間くらい向かっているけど、  
なんか頭に入ってこなくて・・・。  
先生：そんなことじゃダメだぞ。とにかく直前ぎりぎりまで粘ることが大事だ。  
やれば必ず結果に結び付くから、な。

(解説&アドバイス) **元気のない生徒には、未来を予測できる言葉かけを。**

せっかく励ますつもりが、お説教のようになってしまうと、生徒はますます自信をなくし不安になりかねません。特に、元気がなくなっている生徒に、「ダメ」というネガティブな言葉かけは逆効果です。「元気が出さなきゃダメ」なのではなく、「どうしたら元気が出る？」と未来を意識した言葉かけをすると、生徒は前向きになっていくことができます。

そこで、今回のようにセンター試験の結果に動揺し落ち込んでい

る生徒には、できていないことを指摘するのではなく、過去から現在までにできていることを認め、そこから未来に目を向けるような質問をしていくと、気持ちが前向きに切り替わっていきます。例えば、「10月は1日どのくらい勉強していた？」「センター試験の前は？」と事実を確認していき、それまでの頑張りを思い出させてあげ、「じゃあ、今後はどうしていきたい？」と未来に目を向ける問いかけを心がけましょう。

ありがちなやりとり

③

## 不安を あおってしまう

先生：最近受けている大学の手応えはどうだ？  
生徒：・・・あんまり。  
先生：センター試験の結果があまりよくない感じだったんだって？  
生徒：はい。なんか焦っちゃって。滑り止めにしていたところも、  
あんまり点数とれてる気がしない・・・。  
先生：そうかあ。だったら、2次募集などの情報も、  
ちゃんと確認したほうがいいな。現実的なところで。  
生徒：はあ。やっぱり、早めに手を打ったほうがいいんですね。  
先生：浪人できるならいいんだけどね。  
そのあたり、一度ご家族と話をしておいたほうがいいかもしれないな。

(解説&アドバイス) **生徒の「困り感」に寄り添う声かけも意識しましょう。**

生徒の状況を冷静に受け止めて分析し、アドバイスをしているという点ではいいのですが、やや性急な印象で「冷たい」と思われる可能性があります。また、最初に「よくない感じだったんだって？」と、悪いほうに焦点を当ててしまっていますので、生徒は不安をあおられた感じがしているはずですよ。

まずは、生徒の感情に配慮し、最初は「今後どうしたらいいか、不

安だよな」と、生徒の「困り感」に寄り添う声かけから始められるといいでしょう。そのうえで、「どうしたらいいと思う？」といったように、生徒主体を意識した質問をしていきましょう。そして、生徒の今後への思いや考えが述べられたところで、「先生に援助できることは何かな？」と問いかける。そうすると、生徒は安心してアドバイスを求めてくるでしょう、何かあれば頼りにしようという気持ちにつながるはずですよ。

受験期の  
生徒面談のポイント

1. 不安な気持ちを受け止め、寄り添う
2. ネガティブを強調せず、未来へ目を向ける
3. あくまでも生徒主体で考える

⇒ こんな面談にできると・・・

先生：最近受けている大学の手応えはどうだ？  
生徒：・・・あんまり。  
先生：あんまりというのは、うまくいかなかった感じなのかな？  
生徒：はい。  
先生：そうか。それは不安だよな。ちなみに、国語は何割くらいの出来だった？  
生徒：う～ん、国語は結構良かったから7～8割くらいはいけたと思う。  
先生：国語は良かったんだね。じゃあ、英語は？  
生徒：ああ～、5割くらいかな。読解が全然だめで。  
先生：そうか、英語の読解が苦手だったんだ。  
そうすると、今後どうしたらいいと思う？



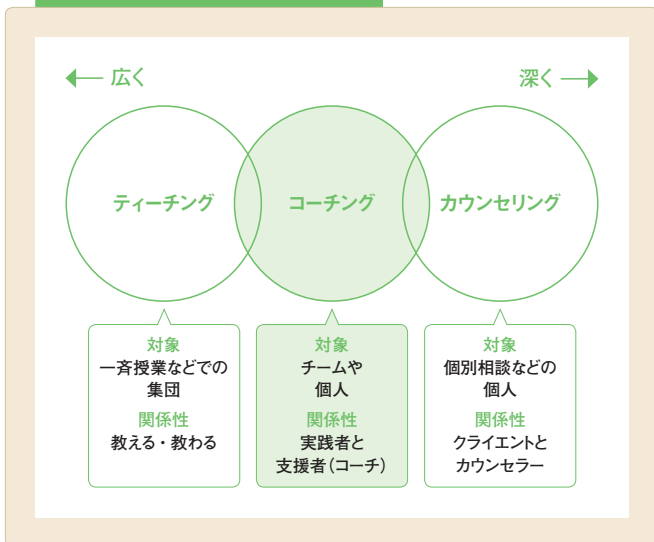
## 生徒主体で目標達成していくためには、 コーチングスキルが参考になります

### ティーチングとカウンセリングの 間をとるコーチング

今回のような目標(受験に合格する)が明確な場合の面談には、コーチングスキルを活かすといいでしよう。

コーチングスキルは、図のようにテ

図1 コーチングの位置づけ



### ●菫間澤先生が薦めるコーチングの参考図書



『教師のための子どもが動く!コーチング50』  
神谷和宏著  
金子書房

小・中学生のケースですが、学校場面でのコーチングが漫画仕立てでわかりやすく理解できます。



『図解 部下を伸ばすコーチング』  
榎本英剛著  
PHP研究所

1999年発行『部下を伸ばすコーチング』に図解を加えた改訂版。コーチングの基本的な考え方がしっかり理解できます。

ティーチングとカウンセリングの間のような関係だと思えるのかわかりやと思います。授業のような集団を相手にして「教え、導く」ティーチングから、個を対象に寄り添い、話を深めていくカウンセリングへ。コーチングはその中間に位置すると考えら

れます。普段ティーチングを主にやっている先生方にとっては、いきなりカウンセリングスキルと言われるよりも取り組みやすいスキルだと言えます。むしろ、日頃の授業のなかで生徒との双方のやりとりを重視している先生は、普段からのコーチングスキルを活かしていると言えます。

まず、コーチングで大切なのは、生徒との関係が「対等」であるということです。一方的に教えるのではなく、主導権はあくまでも生徒にあります。具体的な計画を与えるのではなく、生徒と協議をし、お互いの同意を得て、行動を決定する。その一連の流れを、「面談のなかで行います。

### 質問技法を使い分けて、 前向きに気づきを深めていく

コーチングでは「質問」を大事にします。前ページの「こんな面談にできる」と「見ていただく」と、最初は、「手応えはどうだ?」というオープンクエスチョンで始め、生徒の感情に寄り添います。その後は「国語は何割くらい?」といったように、生徒にとっては答えやすいクローズドクエスチョンを重ねていきます。そしてその後「じゃあ、どうしたらいいと思う?」と、またオープ

ンクエスチョンによって考えを深めていく。このように質問技法を交互に使い分けることによって、うまくいっている部分、課題がある部分を、徐々に気づいていけるようにすることが大事です。

また、質問をする際には、過去質問と未来質問を意識して、前向きになつていける質問の構成を考えることが大切です。例えば、先ほどの国語や英語が何割できたかという問いは、過去の事実を確認しています。漠然と「できていない」という意識から、できていること・できていないことが明確になり、それに対して「じゃあ、どうしたらいいと思う?」という未来を予測する質問によって、前向きな気持ちになれるよう支援します。

コーチングで重要なことに「承認アクト(レジメント)」があります。存在に気づいているという「認知」、あなたを見ていますという「関心」、わかっていますという「理解」、認めていますという「承認」、あなたは素晴らしいという「称賛」。これら全体を通して、相手を承認していく。つまり、無闇に誉めたり励ますことではなく、日頃から生徒への関心や理解を示し、そのうえで声かけしていくことも、停滞する生徒の支援には欠かせないのです。